

うるしを芳野にてうゆる法、先苗を仕立るは、秋子を取て俵に入ぬれゑんなど、つねに水つかふ  
邊りにをき、俵の上より水をそぎ、泔水シホミをも時々かけて、古筵コシこもなどをおほひ置ば、春になり  
て水青みて、芽立の見ゆる時、苗地を冬より耕しこなし、熟し糞をも多くうちさらし置たるを、畦  
作り、菜園のごとくしかきならし、種子をむらなくばりとまきて、肥土を以ておほふ事、樹の厚  
き棚をかき、日おほひをし、早せば水をそぎ、草はありともとらずして、一年は其まゝをき、二年  
の後、根の土ながら掘取移しうゆるなり、

〔草木六部耕種法二十〕漆樹ハ諸農書ニ、唯其膠液タワレシヲ採採タキノ法ノミヲ説テ、絶テ實ヲ採コトヲ論ジ

タル者ナシ、且漢土人ノ有識多キヲ以テ、尙漆木子ウルシノミニ蠟有ルコトヲ知ラズ、故ニ本草ヲ始メトシ

テ、種々物産書地志等ノ多キコト、倒牛折軸ス、然レドモ漆子ニ蠟多キノ説ハ、未曾見及ザルナリ、

蓋コレ有ン愚老〇佐藤信淵ハ未コレヲ見ズ、抑漆樹ハ第十六番ノ氣候ヲ得テ、其實能豊熟ス、故第十

番以上ノ温暖地ニハ豊熟セシメ易カラズ、然ドモ山間北陰ノ地ニ栽バ、亦能豊熟ス、又二十番ノ

寒國ハ必山南ノ陽地ニ栽ヲ良トス、此ヲ植ルノ法ハ、十二月上旬ニ、其實ヲ曰ニテ擣ソド外売ソドカト蠟氣

トヲ剝テ、其核ヲ探ハシ半切ハシ桶ヲニ入テ、微温水ヲ灌ギ、叮嚀ニ洗テ、其蠟氣ヲ除去、五七日モ此ノ如クシ

テ、蠟氣ノ無ニ至リ、此ヲ藁カ圃ラニ入、土中ニ埋メ、上ニ菰筵カ類ヲ被セ、度々水ヲ澆テ、温養シ置コト、黄

蘆ノ種子ヲ養ニ全ク同ジ、翌年ノ三月上旬マデニ、豫テ苗地ヲ調理、此ヲ蒔キ亦黄蘆ノ子ニ異ナル

コト無シ、蒔キ付タル年ノ九十月、苗延テ葉落タル頃ニ、片手ニテ其苗ヲ引拔テ見ルニ、能引拔

ル苗ヲバ悉拔棄ベシ、其中ニ横根ノ淺ク十方ニ蔓テ、容易拔ザル苗アラバ、此ヲバ拔棄ズニ立テ

置ベシ、凡漆木苗今年蒔テ今年中ニ生シタルハ、大抵皆牡木ヲナル者ナリ、牡木ハ實ヲ結ザルヲ以

テ栽テ益ナシ、故ニ皆拔棄ベシ、天地自然ノ性ニテ、牡木ヲ牡草ハ其根直ニ深ク延下リ、牝木ヲ牡草ハ

其根横ニ淺ク蔓滋ヲ以テ、其拔易ハ直根ナル故ナリ、其拔難ハ横根ノ蔓タルヲ以テ、或ハ牝木ナル